

いわゆる『ターヘル アナトミア』 の蘭訳者ディクテンとその学統

石田純郎、H・ボイケルス¹⁾

『解体新書』(一七七四年江戸刊)が、日本で最初の本格的な西洋医学書の翻訳書であり、この本の出版が蘭学の興隆を招いたことは定説となっている。この本の原著は、J.A. Kulmus 著の『解剖学表』(一七二二年刊、いわゆる『ターヘル アナトミア』)であり、これをライデンの外科医 G. Dicien が一七三四年にオランダ語に翻訳した。このオランダ語版の重訳が『解体新書』である。

蘭訳者ディクテンについては従来ほとんど知られていなかった。ライデン市古文書館ギルドセクション(三四八、三五〇、三五一)の史料と、ライデン市立博物館(Lakenhal)の「外科医の部屋」にある外科医ギルドのボードの記録により、下記ことが判明した。Gerrit Dicien の名は、ときに Gerrit あるいはラテン語風に Gerardus と綴られ、

姓はときに Dikten, Dickten あるいは Dickte と綴られている。ディクテンは一六九四年に生れた。一七一三年三月一日にライデンの外科医マスター Johannes van Riet に入門し徒弟奉公を開始、一七一六年五月にはマスターを John Steeneveld に変えた。一七二二年二月十四日には、ライデンの外科医ギルドの試験に合格した。一七三四年にクルムスの『解剖学表』を蘭訳刊行した。そして一部を、ライデン大学解剖・外科学教授 B.S. Albinus へ謹呈した。一七三九年には「町外科医」として大学の医育(外科臨床)を担当、一七四〇年にはギルド評議会の試験係マスターに任命された。一七四四年から一七六八年の間はギルド評議会の参事を、一七四九年から一七六四年の間はギルドの正外科医のメンバーを務めるなど、ギルドの要職を歴任した。この間一七三九年から一七六五年にかけて、五冊の蘭訳医学書の序文を執筆している。一七七〇年七月二十二日に没した。

一八世紀の欧州では、医師の身分や資格にその専門や受けた教育により、大きな差が存在したことに留意する必要がある。内科医、外科医、産科医と三大別されるが、その

中にもまた複雑な資格が存在した。これは単に当時の階級の存在した社会状況の反映である（石田純郎『実学史研究VI』）。一八世紀のオランダ医は、上層から「MD外科医」「ギルド外科医」「理髪外科医」「その他の外科医」に分けられたが、『解剖学表』は、その中のギルド外科医のためのハンドブックであった。初心者用（酒井シヅ『日本の医療史』二七八頁）のものであったわけではない。

日本の近代西洋解剖学の歴史は、一七七二年刊の『和蘭全軀内外分合図』に始まり、『解体新書』そして以後連続と続いていくというのが通説である。ところがオランダ・ドイツの学界では、『解体新書』の原著『解剖学表』は近代解剖学とは見なされず、前近代的なブロック解剖学だと評価されている（A.M. Luyendijk 一九七三）。この本は、一八世紀後半の一連の解剖技術の向上、外科技術の発達以前の解剖書であった。この本が日本で近代解剖学の始まりとされているギャップについても、再検討の必要がある。

ディクテンと同世代のライデンの外科医に H. Uthoorn, L. Heister, J. de Gorter 等と H. Korp がいるが、彼

等の著した、あるいは蘭訳した医学書も日本へ受容されている。Heister を除く三名はギルド外科医の資格をもち、その一方でライデン大学でも学んだ。Heister だけはギルド外科医ではないが、ライデン大学で学位を取得した。このことから、一九世紀前半までに日本へ受容された医学書の多くは、外科書だけではなく、内科書・薬物書を含め、一八世紀のオランダのギルド外科医のための本であったと推定される。

オランダの国策貿易会社の日本出張所であった出島の蘭館医は、ギルド外科医がその大半を占め、オランダ陸軍軍医部門の管理のもと、ジャワ・オランダから日本へ派遣されてきた。その蘭館医の学統が、蘭学として日本へ受容されたのである。それはラテン語が公用語であった大学レベルのものでは、決してなかった。そして後に、一九世紀に入ると、外科医の学校であるウトレヒト陸軍軍医学校の学統へと受け継がれることになるのである。

1) (三菱水島病院)

2) (ライデン大学医史学)